シリーズ ―召命―

どうして神父さまに!!

菅原友明 神父

今回は京都教区司祭菅原友明神父にお話を伺いました。

（2009年6月～2010年6月に、掲載したシリーズの続編です）

○は編集子

●は菅原神父

○　カトリックとの出会いを聞かせてください。

●　大学を中退し郵便局で働きはじめて数年たった頃、夏に京都旅行をしました。今は無き松ヶ崎の簡保の宿に泊まりましたが、朝、窓から見た光輝く風景に見入ってしまい、またここに来なければと思いました。そのため、佛教大学の通信教育部に入学し、スクーリングのために度々京都に来るようになりました。佛大での、「朝の宗教行事」でお念仏を唱えたのが宗教との出会いでした。法然上人の求道の遍歴に憧れて、京都中の上人ゆかりの寺院を巡礼しました。上人が若き日を過ごされた比叡山黒谷の青龍寺には何度も訪れましたし、知恩院の御廟にもしばしば通い、静かなひと時を過ごしました。ある夜、木屋町で知人と飲んでいて帰りが遅くなり、これも今は無き河原町三条のサウナオーロラで仮眠しました。この仮眠室に置いてあった「1ポンドの福音」という高橋留美子のマンガがキリスト教との出会いとなりました。当時、結婚のことを考えていた私でしたが、その主人公のシスターが「私は神に仕える身ですので」と言って、独身生活を守ろうとしているシーンが、不思議に印象的でした。なお、サウナオーロラは私の司祭叙階式の直前に閉店しました。今のコクミンドラッグの二階以上の空きスペースがその跡です。一方、「1ポンドの福音」は、私が召命のために京都に来てから物語が完結し、主人公のシスターは修道院を出て、それまで彼女が支えてきたボクサーと一緒に生きる道を選びます。このサウナでの、このマンガ本との出会いによって、私は生まれて初めて教会に行くことになりました。26歳の時でした。

「うーこんどの」にカレーを振る舞う

○　神父様になろうと思われたお話を聞かせてください。

●　先ほど触れましたが、京都の松ヶ崎の朝の光景に強くひかれ、いつかこの街で暮らしたいと思っていたので、とにかく京都にある修道会を探しました。31歳の春、ちょうど勤続10年となったのを期に郵便局を退職し、ヴィアトール修道会の志願者になり、ついに京都にやってきました。この時から、司祭に叙階されるまで、実に15年

という歳月が過ぎましたが、どうして司祭になったのか、という問いには、「わからない」としか答えようがありません。たとえば「どうしてこの人と結婚したのですか」と聞かれた場合、それを説明することは困難で、どんな言葉を使ってもうそになり、結局、「わからない」というのが一番誠実な答えなのではないでしょうか。去年、モンロイ神父様帰国の際、時報のインタビュー担当者として、「どうして神父になろうとされたのですか」とお聞きした時、「どうしてでしょうね。わかりませんね。」とお答えになったのが預言的で心打たれました。この人と結婚するとか、司祭になるとか、そういうことだけでなく、この地上でなぜ私が今のこの生き方をしているのか？深く見つめれば見つめるほど、「わかりませんね。」となるのだと思います。

○　司祭叙階から3年が経ちましたが、今のお気持ちを聞かせてください。

●　信仰生活というのは人の思いをはるかに超えているのだと思います。私達が思い描くどんな理想的信仰生活像も、結局は人間的なものに過ぎないはずです。人間的に見た時、自分の司祭生活は、バラ色でもなければ満ち足りているわけでもないし、やりがいを強く感じているということもありません。ただ、キリストの過越の神秘、十字架のあがないの神秘、キリストの流された血が私達を永遠の命に導いたということ、そして、これらのことと一つに結ばれている聖体の秘跡、それを生きて、伝えていくことを強く抱いています。そして、各教会でお会いしているすべての方に支えられていることの有難さにいつも感じ入り、深く感謝いたしております。私達の教会が、贖いの神秘を伝え、ご聖体の秘跡を伝えるため、私の司祭職のため、どうぞお祈りください。